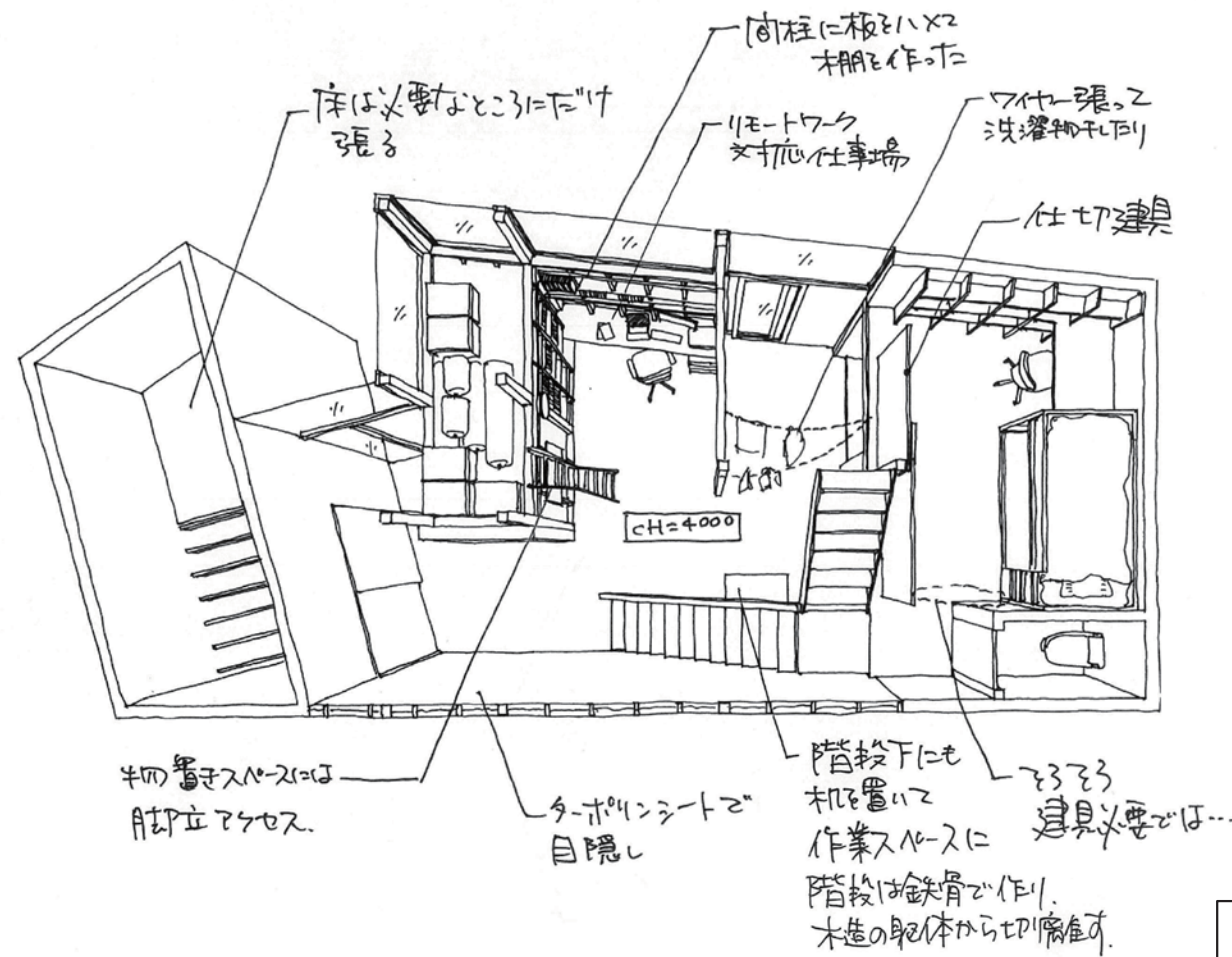


Information for Constructors NetworkSE



「動的な清々しさをめざす」

連載「私の家」は、建築家が1枚のスケッチを通して自邸を語るものである。どのような思想に基づいてつくられた空間なのか、あるいは日々どのように過ごす場所なのか、写真ではないぶん、想像力を働かせ、読み込んでいただきたい。

第23回は建築家の伊藤暁さんの自邸である。傾斜地の多い横浜市の住宅地の北斜面に建つ。専門誌に発表する際に伊藤さんは、とあるリノベーションを通じて、「架構がつくる外側の論理と、家らしさをもたらす内側の論理」はそれぞれ独立してあるものだと感じ、自宅ではそれを実践したと述べている。竣工して9年ほど経った現在の心境を綴ってもらった。

自宅を建てることになった際に考えていたのは、工事現場が持っているような動的な清々しさを住宅に纏わせられないか、ということだった。

建設中の現場には独特の空気が流れている。更地だった場所に基礎を打ち、その上に架構を組み、そこから天井を張ったり、壁を立てたりしていくのだが、ちょうど建て方が終わってから内装仕上げ工事が始まるくらいまでの、建物の躯体や下地が頭になっている間が、とてもダイナミックで面白く、かつ美しい。隙間だらけの建物には常に空気が流れ込んでいて、建物全体が動き続けている。それがとても清々しいのだ。建物が完成に近づくにつれてその動きが徐々に鎮まり、清々しさが失われていくのは、もったいないなあと常々感じていた。

そもそも住宅は、使い手の状況が変化しやすいビルディングタイプである。家族の人数は増えることもあれば減ることもあるし、成長や老いによってお互いの関係性も変わる。快適な寸法や温熱環境も然り。建設時によかれと思う計画はいつまで有効かわからない暫定的なもので、にもかかわらず将来どんな変化が訪れるかは予測不可能で、予め備えておくことも難しい。つまり「生活」と「建築の形」が一致することはない。

であれば、いっそのこと、住宅は永遠に現場であればよいのではないか。そんなわけで、動的で清々しい現場を設計しようと臨んだのである。その結果、躯体や下地が剥き出しだったリ、シートを張って目隠しをしたりと、各所が暫定的で、工事中のような状態で生活を始めることとなった。それから10年近くが経過し、あちこちに手を入れ、緩やかに現場を進行させながら生活を営んでいる。もうすぐ高校生になる息子の部屋にはそろそろ建具が必要になる気がしているが、当の本人はオープンな状態をまったく意に介していないようだ。本当に、家族というのは予想通りにいかない。だから、私は現場に棲んでいる。

伊藤暁(いとうあきら) 1976年東京都生まれ。2000年横浜国立大学大学院修士。2002-2006年 a a t + y o m i n o m o t o 建築設計事務所勤務。2007年に伊藤暁建築設計事務所設立。現在に至る。2017年東洋大学准教授。

第23回

私の家

スケッチ・文 建築家 伊藤暁



巻頭インタビュー

これからの建築生産者の生き方を考える

松村秀一(早稲田大学 研究院教授)

SE構法の実例

Coconimo SAIDAIJI

企画・構想：近鉄不動産株式会社
設計：株式会社HTAデザイン事務所
施工：近鉄不動産株式会社 特建住宅建設グループ

THE PREMIUM ONE GALLERY

設計施工：山万株式会社

木造の21世紀を考える
大西麻貴 建築家

私の家
伊藤暁 建築家

VOL.
189

Sep. 2023

不安定な世界でも、 建築物の木造化への流れは揺らがない時代へ

かつては「10年ひと昔」と言われていましたが、今は5年いや3年ひと昔と言えるほどに変化の速い時代になりました。

3年前に新型コロナウイルスの蔓延によるパンデミックが宣言され、世界の政治・経済は大きく影響を受けました。多くの人命が失われ、医療崩壊を起こした国もありました。最初にウイルスが発生したお隣の中国では、強権で封じ込めながらも行き過ぎた規制が災いとなり、社会経済に大きな打撃をもたらす結果となりました。鄧小平政権の改革開放政策以来続いた高度成長が、習近平政権の3期目に入り独裁体制が強化された直後にパンデミックに見舞われたわけで、これまでの高度成長に陰りが見え始めました。そこに米中デカップリングで拍車がかかり、中国は世界の工場としての機能を失いつつあります。

ロシアのウクライナ侵攻、台湾有事を見据え、先進7カ国では経済安全保障を視野に入れて、製造業を中心に海外の生産拠点を自国回帰させる動きが目立つようになり、サプライチェーンのグローバル化に逆行する動きが目立ち始めています。

日本では、国際的に遅れをとったとされるデジタル化社会への移行により本腰が入り始めました。若干の勇み足で少々もたつきが気になるころではありますが、マイナンバーカードの普及による行政の効率化が期待されます。

国内経済は11カ月連続の3%を超えるインフレとなり、今年の賃上げレベルが来年以降も続けば、わが国の経済は長年のデフレを脱してようやく成長軌道に乗れるのではないかと期待されています。

私たちの業界では、2年前のウッドショックで始まった繁忙が嘘のように住宅の新築が低迷しています。2~3倍となった木材相場も、今は2~3割高で落ち着いていますが、異常な値上がりで客離れを起こした木造住宅需要の回復は遅れるかもしれません。一方で建築物の木造化の流れはゆるぎない時代の傾向で、非住宅分野については、公共も民間需要も手堅い動きをみせるでしょう。

この2~3年に起こった、あるいは起こりそうな変化について述べました。これから起こる変化については予測可能なことと、予測不能なことがあります。可能なことについては、できる限り正確な予測を立て、しっかり準備して、変化をチャンスと捉え、利益貢献できることが私たちの務めだと思っております。

2年後の2025年4月には、4号特例の見直しと省エネ基準の適合義務化がやってきます。ここが正念場です。

他構法ではできないけれど、SE構法ならば実現できること、ターゲット・ユーザーに向けて、ニーズが強い部分をアピールし、2025年4月にそれを最大化できるよう、プロモーションの準備も進めています。

また、10月には8月のオンライン勉強会に続き、リアルな場所で登録施工店勉強会を開催します。SE構法と改正壁量の具体的な違い、省エネ改正の動向などを解説し、ゲストも交えてどこよりも早く法改正を絡めた住宅市場を予測します。ぜひともご参加ください。

株式会社エヌ・シー・エヌ 取締役会長
杉山恒夫

耐震構法
SE構法

これからの建築生産者の 生き方を考える

聞き手：橋本純、長井美咲 / 文：長井美咲 / 写真：栗原論 (特記以外)



早稲田大学 理工学術院総合研究所 研究院教授

松村秀一

SHUICHI MATSUMURA



間4棟の工務店にそれは難しいから、下小屋で加工できる範囲内の部品化。それでA棟とB棟をつくったわけですが、画期的だと思ったのは、「多くの日本の工務店はAとBの間にある」という大野さんの言葉です。つまり両極端の2棟はあくまで見本で、これらの中間がリアルな世界であると。各工務店が自分たちの規模に応じて組合せを選べ、その組合せのパターンはいろいろあり得るという思想が背景にあった。大野さんは産業全体を考えているタイプで、僕の関心とわりと近いところがありました。設計でも、誰かのための1棟をつくるということを中心にはしていませんでした。

メタポリズムの表現も 部品化・ユニット化の流れから

松村 部品化木造住宅は時代の流れから生まれたものだったと思います。世界中が部品化やユニット化を目指した時代が1960年代にあり、大野さんも若いころにその動きを見ていた。それをどう理解するかとか、どんな方法論として自分の中で消化しているかはそれぞれ違う。たとえば黒川紀章のメタポリズムのカプセルという概念は完全に部品化・ユニット化の流れから出てきたものですが、カプセルを取り付けるという建築表現の背後に明確な産業の構想はない。つまりあくまでもメタポリズムの表現である。しかも「中銀カプセルタワービル」は最終的に区分所有マンションだったので、各住戸がカプセル型だからというだけでなにかが動くことは社会制度上あり得ない。いろいろな意味で建築家的限界の中での表現であったことは間違いないでしょう。その後、メタポリズム、それに伴う表現としての部品化やユニット化は引き潮のようにすーっと引いていくけれど、大野さんの部品化やユニット化の世界は明確な産業像を前提とした方法論だったので、重要な概念としてその後もずっと生きていた。そういう大野さんのような建築家は極めて稀だったと思います。

また、産業自体も部品化やユニット化を突然捨てることはなく、そのまま進んでいきます。建築思潮や建築家が考えるテーマから外れていっただけで、産業のリアリティはそれをテーマにその後も動いていた。それでSE構法も出てきたわけでしょう。これは部品化以外のなにものでもない。それを今度は建築家、たとえば難波和彦さんが利用して「無印良品の家」をつくった。僕は研究者とし

だから建設省がこの分野で最初に着手するのはプレキャスト・コンクリートや軽量型鋼等の不燃材料を用いたプレハブ住宅の振興です。1960年代半ばから推進し始め、1970年ごろには新築市場の何割かはプレハブ住宅に置き換わることを目論んでいた。しかし1970年になってみたら、当初立てた計画の半分も普及していない。なぜかという、工務店による在来木造が強いというか、市場に根づいていたからです。それなら在来木造の世界を変えなければダメだ、不燃化の面でも変える必要があるし、工務店の仕事の方法やものづくり方などもっと近代的に、合理化したものに変える必要がある。建設省はそう考えたわけです。

それでまず1974年にツーバイフォー工法をオープン化します。「枠組壁工法」として、建築基準法に技術基準が告示された。ツーバイフォーはもともと北米にあった住宅のつくり方ですが、日本ではオープン化するまで建設に都度の大臣認定を必要としたので、ごく少数の企業しかやっていなかった。それを誰でもできるようにしようという決断を国が下したわけです。しかし、これもその目論み通りにはなかなか普及しなかった。理由のひとつには、中央で決めたことが日本の隅々にまですぐに行き渡るわけではないということが挙げられます。建築基準法に技術基準が告示されたとはいえ、各自治体の行政窓口では「なにこれ」と突き返され、もっとちゃんとした図面を持ってこいなどといわれる。昔は在来木造の場合は大した図面を提出する必要がなかったから、工務店があえてツーバイフォーに取り組む理由はどこにもない。そんなわけで結局、1970年代のツーバイフォーもはかばかしくいかなかった、と僕は理解しています。

「多くの日本の工務店はAとBの間にある」

——大野さんとの在来木造住宅に関するプロジェクトには、そうした世の中の流れの後に出会ったわけですね。

松村 僕が修士1年のころ、建設省は在来木造住宅の合理化を進めるという方向に政策の舵を切りました。そしてその意向を受けて、大野さんを中心とした組織が「部品化木造住宅」を2棟つくるといふプロジェクトが立ち上がり、僕はその報告書を作成することになりました。この部品化木造住宅は、今の言葉でいうとプレカットであり、金物工法であり、パネル工法なんです。2棟のうちA棟は、柱梁の軸組を集成材でつくって大型パネルを嵌め込み、屋根も大型パネル化していた。当時は構造材に集成材を使うことはほとんどありませんでしたが、これからは使うことになると。一方、B棟のほうもパネル化しているのですが、パネルのサイズがやや小さく、プレカットも集成材ではなく無垢材でした。この違いはなにかというと、A棟は年間100棟くらい建てる地域ビルダー向け、B棟は年間4〜5棟の地場の小規模工務店向けで、工務店の規模に応じた異なる部品化があるということなんです。年間100棟の規模なら、大型パネルをつくる加工場を設置することができるだろうし、基礎もプレキャスト・コンクリートでつくるなど、できるだけ工業化を進めたかたが可能なはず。だけど年

建築構法や建築生産の研究の第一人者である松村秀一さん。

研究者人生では工業化住宅などとともに、職人についても研究テーマにしてきた。

職人の世界が入職者の減少や急速な高齢化という危機的状況にあるなか、

設計者や工務店は今後生き残るための新しい道をどう見いだせるのか。

そのヒントとなる話をうかがった。

——松村さんは今春、東京大学を定年退職し、早稲田大学に新天地を得て研究活動を続けておられます。建築構法や建築生産を研究しようと思ったきっかけは？

松村 東大で卒業設計に取り組むころまでは設計をやる気でしたんです。でも、同級生で設計がいちばんできていた青木淳君や花田佳明君と卒業設計でつくるものを話していたら、なにか違うなと思った。あのふたりは早熟で、それ以前から言っていることがわからないということがよくあったのですが(笑)、いわゆる建築家になるのはこういうヤツという感じで、僕は彼らのような設計をやりたいわけではなかった。

そんなときにテレビ番組で、建築家パオロ・ソレリの「アーコサンティ」を知り、衝撃を受けました。アーコサンティはソレリが提唱する「アーコロジー」のコンセプトにもとづき、1970年にアメリカのアリゾナ州の高地砂漠で建設が始まった自給自足・省エネルギーの実験都市です。アーコロジーはアーキテクチャーとエコロジーを組み合わせた造語。それで卒業論文は、こういうことをやっている研究室に入ろうと思ったのですが、まったくなかった。

仕方なく消去法で、最後に残ったのが内田祥哉先生の研究室でした。内田研は建築構法を看板に掲げていたけれど、なにを研究しているかはいまひとつわからなかったので、内田研の卒論のテーマを聞きに行ったら、聞いたこともないものばかり。それまで建築学科で学んで、これが建築学のまともな道だと思っていた以外のところになにかがあるとわかり、そのまま内田研に入りました。

卒論のテーマ設定が、 その後の研究者人生につながる

——卒論ではなにをテーマにしたのですか？

松村 CADです。僕は1980年の卒業で、当時の進んだ企業ではCADでパースくらいは描けるようになっていましたが、実際には見えていない線を消す「隠線消去」に大型計算機でも1日かかるほどコンピュータの計算能力は低かった。CAD自体は大手組織事務所や大手ゼネコン各社、そして大手住宅メーカーも導入始めていました。でも誰もが自在に使うものではなかった。日本でCADをやっている人を集めたら10人くらいという時代です。

卒論のときは内田研がIBMとフェローシップを結んでいたの、IBMの大型計算機を自由に使える場所に入りました。その計算機を使って2年上と1年上の先輩が取り組んでいたのは、パース上の壁に窓を開けるというもの。当時のコンピュータに、中身が密実に詰まった厚さ10cmの壁をまず認識させ、そこに穴を開けるのは、どんな計算をしたらいいのかわからないというくらい、とても難しかった。先輩たちは、パースの中を歩いていて、ここに窓が欲しいと思ったら窓を付けられるという操作をしたいがために、修士課程の2年間をかけて、壁に穴を開けることだけを研究していた。それでようやく開けられたというくらい難しく、先

進的な研究ではあったんだけど、その後、計算機の能力がどんどん上がり、プログラミングも簡単にできるような言語が開発されたら、パース上の壁に窓を開けることなんて簡単にできるようになった。先輩たちがやっていないでも技術は関係なく動いていて、結果として、先輩たちの研究がはかばかしくなにかの役に立つということとはなかったのです。

——無駄な研究だったということでしょうか？

松村 研究なんてだいたいそういうものです。すぐさま実用的に役に立った研究なんてあまり見たことがありません(笑)。先輩たちの研究を見て、卒論でCADの新たな技術課題に取り組むのは時間的に無理だと思い、オーバードクターでその研究の指導に当たっていた寺井達夫さんに相談したら、「建設業界や住宅業界でCADが今どういう状況で、僕らが開発しているものがどう位置づけられるかをテーマにしたらいんじゃないか」と助言を受けました。

それで卒論のテーマが決まったのですが、これは僕のその後の研究者人生につながっているところがあります。僕が研究対象にするというか、全体的に考える傾向にある事柄というのは、産業の全体像や、その産業が今どうなっているかということなどで、そういう漠然とした動向や広がりに関心がある。それはおそらく卒論のときに、CADが今どうなっているか調べてこいと言われたことから始まったと思っています。

その後、修士課程に進んですぐに、内田研OBの大野勝彦さん(1944-2012)と一緒に仕事をすることになります。内田研は上下の仲がよいというか、OBからよく呼び出されて仕事を手伝わされるんです。大野さんは積水化学工業が1971年に販売開始した工業化ユニット住宅「セクスイハイムM1」を開発したことで知られています。開発したとき、大野さんは修士2年から博士1年の学生だった。にもかかわらず四ツ谷に事務所を構え、内田研OBの中でも際立って早熟な人でした。

在来木造 vs. 不燃化と近代化を目指す政策

松村 大野さんとの初仕事は、当時の建設省が進めていた在来木造住宅に関するプロジェクトでした。それは建設省が初めて在来木造を取り上げたものでした。それまで建設省は政策の重点のひとつを「都市の不燃化」にしていたから、少なくとも1960年代前半までは都市から在来木造をなくそうと考えていたと思います。戦争で都市部の多くの木造建築物が燃えたからです。もう二度と燃えない都市をつくるというのは多くの国民が望む事柄であったから、木造でまちをつくるわけにはいかないと考えていた。また、当時の在来木造の生産体制はまったく前近代的で、戦後政策のもうひとつの柱である「近代化」という路線から見ても、不燃化という路線から見ても、在来木造はない方がいいと思えるし、少なくともそれを持ち上げるような政策は絶対に考えられませんでした。

て、この動きをどう理解したらいいのかと考えるわけです。播繁さんが阪神・淡路大震災で木造住宅の被害に心を痛め、木造住宅の耐震性を高めるにはどうしたらいいかを考えたというストーリーがあるけれど、物事は技術者の良心だけで普及するわけではないでしょう。播さんと同じようなことを考えた人は他にもたくさんいたはずで、SE構法がビジネスとして成り立っている理由は他にある。工務店がこれを使うことの合理性があるのかもしれないし、ちょうど集成材の構造材が無垢材に置き換わっていく時代背景もあったでしょう。いろいろなことが複合的に関係して、産業は成長して行くのです。

家づくりの面白さを職人世界に閉じ込めておくのはもったいない

——今年3月に出版された『新・建築職人論』でもお書きになっているように、松村さんが最近、特に関心を寄せているのは職人社会をどう開いていくか、ということですね？

松村 職人がいないということが極めて急に、現実になってきたと思います。前からひたひたと危機的な状況は近づいていましたが、各工務店レベルで大工がいなかったら仕事を受けられないということが今、起こり始めています。一般的にビジネスをやっている人は、とにかく明日できるかどうか大事だから、わりと近視眼的に物事を考えがちなところがあり、職人問題にしても、現場作業をロボットに代替させられないかとか、工場で部材の大半をつくって現場ではほとんど職人がいなくても組み立てられるようにできないか、といった意見が聞かれるわけですが、僕の関心事は、千年続いてきた職人社会がなくなっていいのか、ということなんです。

職人社会はどんどんなくなる方向に動くでしょう。現場作業をロボット化とか大型パネル化すると、職人はほとんど要らないし、パネルを取り付けるだけの工事にはなんの創造性もない。そういうつまらない仕事に有望な人材は集まらないから、この世界が豊かになることはない。それははっきりしています。そして、その方向にみんなが向かわざるを得ない状況になっているのはとてもマズいことだと思う。

そんななかで特にコロナ禍以降に顕著になったのがDIYの隆盛です。ステイ・ホームにより強制的に自分の家と向き合うことになった結果、自分の生活環境を自分で変えてみようという人が非常に増えた。そして実際にやってみて、DIYにやりがいや楽しさ

を見いだす人が多いこともわかってきた。この人たちが職人っぽくなる方向があります。つまり、いろいろなところから職人社会に入ってくることができ、いつでも出ていける、そういう世界のつくり方があるのではないかと思います。

たとえば柱と梁はRC造で、ブロックを積み上げて壁をつくった3～4階建てが世界中どこでも建っています。世界的によく見られる構法で、これにはふたつのつくり方があります。柱と梁を最初にプロがつくってから、その間のブロックを居住者が積んでいく方法。もうひとつは、柱の分だけ空けてブロックを積み、適当に鉄筋を差し込んで後からコンクリートを打つ方法で、結構たくさん見られるのですが、これは素人がやっている。そのふたつのつくり方が世界中で混在していて、出来上がった建物をひと目見ただけではプロがやったのか、アマチュアがやったのかはちょっと判然としない。世界的に見ると日本の職人のレベルは異様に高く、それがゆえにプロとアマチュアの仕事を明確に分けられますが、他の多くの国々ではこのようにプロとアマチュアの境目はグラデーションで、上手な素人よりも下手な職人がいるということが普通にあり得ます。

本来、家づくりというのは面白いことをたくさん含んでいる。それを職人社会だけに閉じ込めておくのはもったいない。新築住宅がこの先増えないということは、ストックをいじる仕事が増えるということ、新築住宅はきちんと性能が出ないといけないという制度が支配的だし、法律も厳しくなる方向に進んでいますが、ストックの活用に関してはもっと緩和すべきだろうということを行行政側も考えています。すべてきちんとプロによって完成されていないといけないという世界と、そうじゃないところにストック利用の豊かさがあるという世界と、価値観が制度的にずれてしまっている。これは行政が考えるべきことですが、いずれ調整する時が確実に来るだろうと思います。

工務店の新しいモデルのヒントをリノベの世界に見出す

——職人が少しでも増えるために工務店がすべきことは？

松村 僕が卒論を書いた1980年の国勢調査によると、全国で大工は93万人いました。それがピークで、以降は右肩下がり。建設省関係の委員会などでも、おそらく昭和が終わるころには大工の減少をどうするか委員会みたいなものが出来ていたと思います。でも、そのころに議論されていたことと今議論していることはあん



「大工の正やん」のYouTubeチャンネルのホーム画面より。正やんは2級建築士と1級技能士の資格を持ち、50年以上の経験がある現役大工。X (旧Twitter) やTikTokとも連携して情報発信を行っている。

まり変わりません。待遇や社会保障などは少しずつ改善が図られていますが、他の人手不足の産業ではそれはすでにきちんと整っている。すでに整っていても人手不足なわけです。だから職人が少しでも増える状況をつくるには、理想論的ですが、職人社会の豊かさを取り戻していくことが大事ではないかと思います。他の仕事ではつまらないと思った人たちを受け入れる受け皿として、面白いことをしたいなら職人でしょ、というふうになっていかないと、職人がなんのためにいるのかわからない。とはいえ、それがなかなか難しいことなんですよね。

ただ、この職人社会については建築界が想定していなかったところから、大きな影響力を持つ新しい人たちが登場していることも事実です。たとえば鹿児島南九州市で「コミュニティ大工」として活動する加藤潤さんとその仲間の方々。加藤さんはもともとDIYが好きで普通のサラリーマンで首都圏に住んでいたのですが、弟が始めたタツノオトシゴの養殖事業を手伝うために家族とともに南九州市に移住した。そこからDIYスキルや持ち前のフットワークの軽さやコミュニケーション能力を活かして、どんどん地域に溶け込んでいき、空き家だらけで困っていた過疎の町を観光地化するプロジェクトを立ち上げた。それがうまくいき、次に空き家再生プロジェクトのリーダーに抜擢され、空き家を次々に店舗や民宿・シェアハウスなどに再生しています。「コミュニティ大工」と名乗っているのは、やっていることが不動産登記なども含めていくつもの領域にまたがり、まちづくりと関係があるからなのと、正式に大工として修業を積んだわけではないから。加藤さんたちの工事では、現場の作業にクライアントの参加は必須、他にあらゆる人が参加できますが、納まりなどはあまり神経質にはチェックしない。なぜならクライアント自身の施工レベルに合わせるから。そして、いちばん大事なのは昼食時間で、ご飯も加藤さんが必ずつくり、それが実に美味しい。そのご飯と加藤さんの話を楽しみに多くの人が現場に集まり、楽しくみんなが作業をするという感じなんです。めちゃくちゃ楽しいから、みんながまた来ちゃう。鹿児島県庁の中にコミュニティ大工倶楽部というサークル活動まで生まれていて、今や40名近くの部員がいるらしいです。もちろん新築で躯体をつくったりはできないし、空き家でも構造体を直したり、腐ったところを取り替えたりするのはプロの大工の手を借りるけれど、他は基本的にコミュニティ大工とその仲間の方々がやっていて、DIYが展開していった先のひ

とつの理想的な姿を表していると思いました。何が理想的かと言うと、現場作業が楽しくて、そこに参加することで人々が豊かな気持ちになるということ。

コミュニティ大工の魅力を解くキーワードは「緩さ」だけど、工務店にとって「緩さ」を目指す方向は現実的ではない。でも、現場を面白くする取り組みは個々にできるのではないのでしょうか。施工のプロセスというのは本来面白いものなんです。「大工の正やん」というユーチューバーを知っていますか？ チャンネル登録者数は建築界最多を誇り、日本語版は63万人以上、英語版も14万人以上。お父さんが大工で、息子が撮影したり編集したりしています。見ている人の20数%は大工で、正やんはYouTube上で大工塾もやっている。それからDIY愛好者も20数%を占めるけれど、残りの50%くらいはただ見ている人たちで、それはつくっている様子を見るのが面白いからなんです。

クライアント参加型の施工というの、リノベーションの世界からそういうノリが広がって、建築思潮としても時代のテーマになってきています。たとえば京都大学の建築学専攻の大学院を出た夫婦が立ち上げた「つみき設計施工社」は参加型リノベーションを標榜する施工会社ですし、「妄想から打ち上げまで」というキャッチコピーを掲げる「HandiHouse project」は、クライアントが施工に参加できるように組み立てていくというプロジェクト全体のマネジメントを仕事にしています。

もちろん、従来のようにきちんとしたものをつくる工務店は一定量必要ですし、それはそれで生き残っていけると思うけれど、これからの時代の新しい工務店のモデルにはなり得ない。新しい工務店像の鍵を握るのは生活者やクライアントの施工参加、あるいは職人が面白いことがやれる機会の創出ではないでしょうか。住宅や住宅づくりはもっと多様であっていいと思うのです。



松村秀一（まつむら・しゅういち）1957年兵庫県生まれ。1980年東京大学工学部建築学科卒業。1985年東京大学大学院工学系研究科建築学専攻博士課程修了。東京大学工学部建築学科専任講師、助教授を経て、2006年から2023年3月まで東京大学大学院工学系研究科建築学専攻教授、特任教授を歴任。この間にローマ大学、トロント大学、南京大学、大連理工大学、モントリオール大学、ラフバラ大学、清華大学で客員教授も務める。2023年4月から早稲田大学理工学術総合研究所の研究院教授。最新刊の『新・建築職人論』をはじめ、著書多数。2005年日本建築学会賞（論文）、2015年日本建築学会著作賞などを受賞。



上／コミュニティ大工・加藤潤さんの活動見取り図。右／コミュニティ大工の現場では、みんな集まってくる食事と茶会がとても大事。（図・写真とも提供：加藤潤氏）



Coconimo SAIDAJI

企画・構想：近鉄不動産株式会社
設計：株式会社HTAデザイン事務所
施工：近鉄不動産株式会社 特建住宅建設グループ
写真：杉野圭
文：橋本純

SE構法の実例



大和西大寺駅の自由通路から望む。手前は区画整理でできた駅前ロータリーと歩行者用通路の一角で、一般車両の乗降スペース。中央に芝生広場を設け、右が近鉄不動産が運営する施設（A棟）、左と奥の3棟（左手前からD・C・B棟）が商業店舗で、テナントは主に飲食店である。右端は近鉄不動産が運営する「K・Dog Spa」というセルフ式ドッグスパ。



平屋で挑む

郊外住宅地の駅前区画整理で生まれた商業地に求められていたのは、大規模な商業ビルよりむしろ広場を囲む小さな店舗の連なりが生み出すホッとする空間だった。

「Coconimo SAIDAIJI」は、近畿日本鉄道大和西大寺駅前に誕生した木造平屋の商業施設である。本計画を主導した近鉄不動産株式会社 事業開発本部の奥啓介さん、本間聖也さん、草間純奈さん、特建住宅建設グループの團野宏紀さんにお話をうかがった。

駅前に平屋で建てる

大和西大寺駅は、近鉄奈良線、京都線、橿原線が結節する奈良県下有数の交通の要衝である。奈良市中心部から西に約5km、大阪難波、京都にも特急電車で30分ほどの距離に位置し、駅西側に西大寺、南に2kmほど行くと唐招提寺、東側には平城京旧跡が広がる、利便性と歴史性を兼ね備えた場所である。一方でその鉄道が平面交差であるため、奈良市ではかねてから地域の一体的発展に向けて、駅の南北をつなぐ自由通路を構想して

おり、近鉄西大寺駅南地区区画整理事業の一環として南口駅前広場と自由通路の整備・設置を行い、2021年に供用を開始した。近鉄不動産は、駅南側にいくつかの土地と建物を所有していたが、区画整理事業に伴う換地で、現在「Coconimo SAIDAIJI」の建つ敷地を取得した。この場所になにを建てるか。駅前ロータリーに面し、周囲には高層集合住宅が林立する。その南側には区画整理事業で整備された住宅地が広がる。容積率を最大限活用して商業施設を建設すれば、規模に応じた収益が見込めそうだが、近鉄不動産の考え方は違った。このまちに住む人たちの日常に寄り添った空間をつくることをコンセプトとしたのである。考えてみれば、大阪・京都に30分ほどの距離にあるわけだから、それらの都市の数多の巨大商業施設よりも魅力的なコンテンツをそろえて勝負を挑んでも勝算は見込めないだろ

左頁：A棟の下屋空間から芝生広場を見る。下屋の架構は主要構造体ではないこと、庇の梁とA棟の架構の接合部の間にも耐火被覆を施したことで、木部の現し仕上げが認められ、下屋空間の軽やかさを生み出している。

右頁上：B棟の下屋空間からC棟方向を見る。正面は東側道路へつながる通路。

右頁下：A棟ワークショップルームから、下屋空間を介して駅前広場と芝生広場を望む。

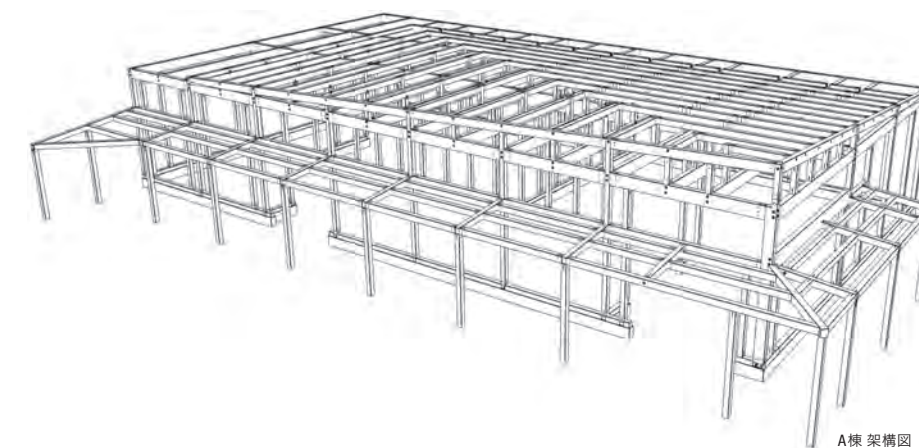
う。むしろ、巨大都市からの通勤通学の帰りにふと立ち寄りたくなる親しみやすいスポットこそ、求められていると考えたのである。そこで彼らはこの施設の中心に芝生広場を据えた。駅を降りて自由通路の高架を歩いて行くと、芝生広場とそれを囲む施設群が目に入ってくる。帰り道にホッとさせる空間が駅から望める。1,500㎡ほどの商業地域に容積率を40%しか使わず施設を建てるという戦略は、この広場から始まった。4棟の木造平屋の建物が芝生広場を囲むように建つ。東・南側のB・C・Dの3棟は飲食店舗で、床面積を100㎡未満として準耐火構造とし、西側のA棟は近鉄不動産が自ら運営する施設で、約270㎡と、他より大きく、耐火構造である。広場には3本の木を植え、それらを囲むようにベンチを据えている。木々が生長すれば心地よい木陰を提供してくれることだろう。

庇の効用

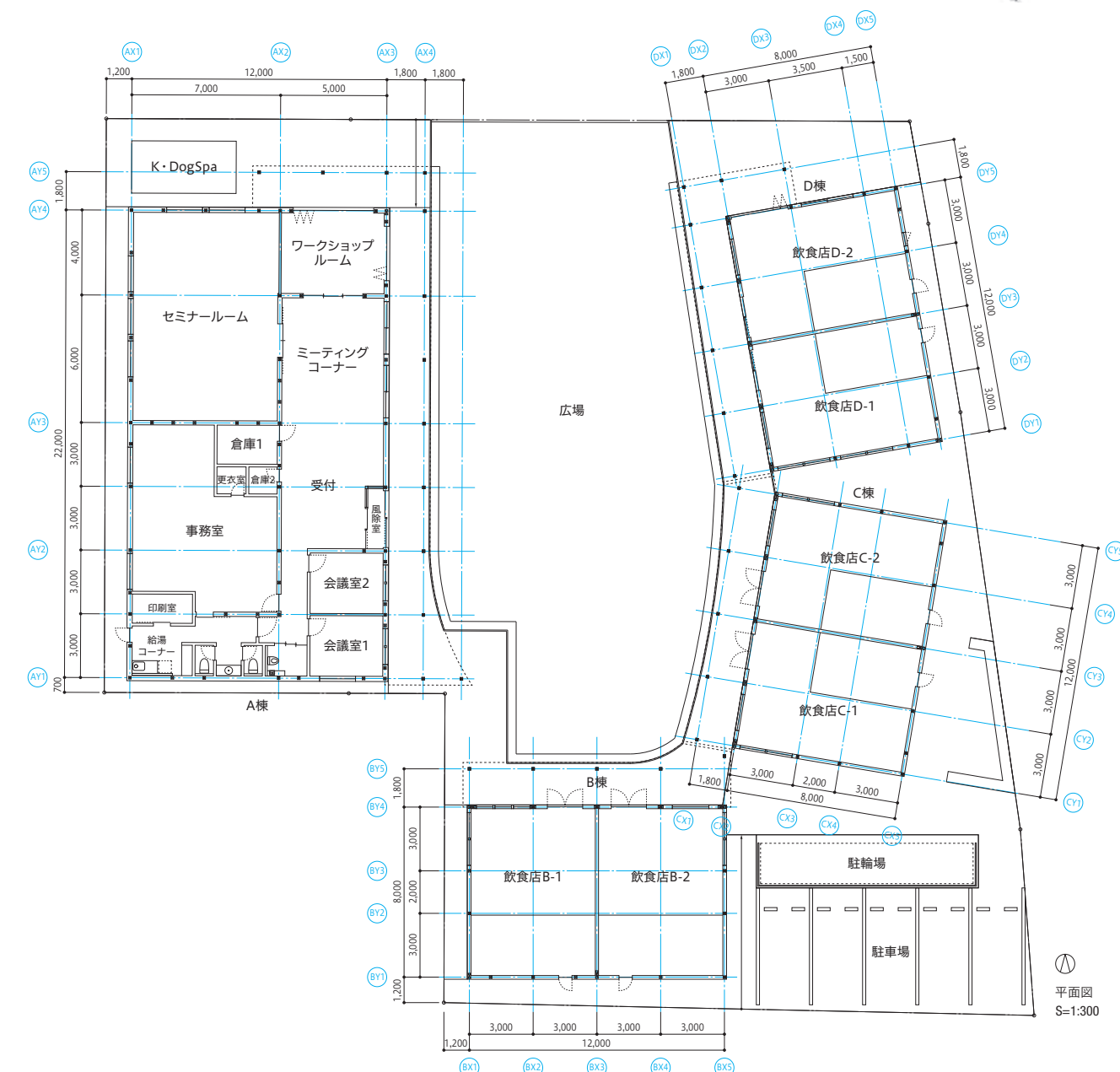
各棟は芝生広場側に庇を張り出し、1,800mm幅の下屋空間を設け、それを連続させて互いをつなぐとともに、建物と広場の間の中間領域的空間をつくり出している。B・C・Dの飲食店舗棟はいずれも8,000mm×12,000mmの無柱空間である。庇側壁面の柱をすべて平角柱（隅部は120mm×360mm、中央部は120mm×240mm）とすることでこの壁面の耐力壁をなくし、開口部を大きく取れるようにして、店舗としての利便性を向上させている。SE構法でなければ難しい架構によって生まれた店舗空間である。庇の張り出しが大きいことで、各店舗は日射の直接的な影響も受けにくくなるので、環境面からも効果的である。地上2階の駅の自由通路から見下ろすと、芝生広場とともに建物の屋根がまず目に入ってくる。計画では各棟の屋根形状に特徴を持た



左頁上：A棟ミーティングコーナーから受付方向を見る。
左頁下：C・D棟に入る飲食店舗（3点とも）。



A棟 架構図



平面図
S=1:300

せるべく、棟を対角線に架けた。屋根勾配は1/10と緩やかではあるが、切妻屋根がもたらす均質で和風な印象を軽減し、各棟に独立性を与えている。それらの建物群に一体感を与えているのもこの連続した庇である。敷地は3面接道で、この下屋空間を通して東側に通り抜けることもでき、路地の役割も担っている。

広場を囲む木造の群造形

近鉄不動産が自ら運営するA棟は12,000mm×22,000mmの矩形平面で、B・C・D各棟の3倍近い大きさがある。だがそれを感じさせないのは、庇の設置に加え、勾配屋根の最高高さで最低高さをそろえていること、外壁を、ベンガラ色の塗装と1,000mmピッチで取り付けられた木製縦桟というデザインで統一したことによる。

A棟は、「住まいと暮らしのふらっとHOME」という自社で運営する不

動産窓口施設であり、セミナールームやワークショップルームなど、顧客や一般市民も利用可能なゾーンとして活用している。会員制のカフェや、隣接してドッグスパも設けた。

ここには、容積を使い切るよりも、小さな建物の群配置によって豊かな外部空間を生み出し、そこを人びとが選択的に歩きたくなるように通路を設け、商業店舗の賑わいや魅力が溢れ出るような半外部空間を配置するほうが、住宅地周辺の商業施設のあり方としてふさわしいという選択的判断がある。いくら車社会であるとはいえ、郊外住宅地の日常は公共交通に依存する部分が大いなのが現実である。広場と低層の建物群と散策路の組合せは、近年見られるようになった商業施設のひとつの潮流といえるが、「Coconimo SAIDAJI」は、そうした流れのなかで、木造平屋の連棟による実践例として位置づけられるだろう。

建物名称 ：Coconimo SAIDAJI 所在地：奈良市西大寺南町5-5 主要用途：飲食店、 宅地建物取引業を営む店舗 建主：近鉄不動産株式会社 設計・監理 建築：株式会社HTAデザイン事務所 担当者名：高原浩之、勢旗樹 構造：株式会社エヌ・シー・エヌ 施工 施工：近鉄不動産株式会社 特建住宅建設グループ	敷地条件 用途地域：商業地域 防火指定：防火地域 道路幅員：北側24m、東側4m、南側6m 駐車台数：5台（テナントおよび商売用） 構造・構法 主体構造・構法：SE構法（木造軸組構法） 基礎：布基礎 杭：砕石パイル工法	規模 階数：平屋 軒高：4,260mm 最高高さ：5,410mm 敷地面積：1,483.75㎡ 建築面積：694.78㎡ 延床面積：582.39㎡ （容積率：39.26%、K・DogSpa含む） 1階：582.39㎡	工程 設計期間：2020年12月～2022年10月 施工期間：2022年10月～2023年4月 設備システム 空調 空調方式：エアコン 熱源：電気 衛生 給水：公共上水道直結方式 給湯：ガス給湯器 排水：公共下水道	電気 受電方式：直接引込み 防災 消火：消火器・誘導灯 排煙：自然排煙
---	---	---	---	---

木造の 21世紀を 考える 48



1

建築家
大西麻貴

愛される建築のつくられ方をめぐって

今年のヴェネチアビエンナーレ建築展の日本館キュレーターを務めた大西麻貴さんは、「愛される建築を目指して」というテーマを掲げた。

愛される建築とはいかにあるべきものなのか、建築の包摂性を通して語ってもらった。

聞き手・文：橋本純、久留由樹子

①「山形市南部児童遊戯施設 シェルターインクルーシブプレイスコバル」。障害の有無や立場の違いにかかわらず、すべての子どもに開かれた遊びの場として計画された。(提供：大西麻貴+百田有希 / o+h)

②「地層のフォリー」。福岡市のアイランドシティ中央公園につくったあずまや。(提供：大西麻貴+百田有希 / o+h)

言葉を越えて通じ合えるものの体験

大西さんは1983年に愛知県のどちらでお生まれですか。

名古屋です。父と母の3人家族で、ひとり娘です。父は祖父が創業した大西熱学という特殊空調設備の会社を営んでいます。愛知教育大学附属名古屋小学校という学校に、電車通っていたので、近所に友達は少なく、家に帰ってからはひとりで空想したり、本を読んだりしていました。お稽古事は、小学校1年生から高校3年生までピアノを続けていて、水泳は小学生時代ですが、選手養成コースに入手前までいきました。今でも4種目すべて泳げますよ。4年生のときには、CISV (Children's International Summer Villages) という子どもの平和教育を促進する世界的な団体のプログラムに参加して、ブラジルのリオデジャネイロに1ヶ月間滞在したことがあります。世界中から集まってきた子どもたちと共同生活をしますが、それがすごく楽しかった。言葉が通じなくても、なぜかなんとかんがえてしまう(笑)。なぜコミュニケーションできているのか、自分でも不思議だなあと感じたことを覚えています。ブラジルの人ってみんな明るくて、サッカーをして遊んだり、なぜかその横をニワトリが走っていたり、自分たちで洗濯をしてバナナの木に干したりと、日々の生活がとにかく楽しかったですね。

中学校はどちらでしたか。

南山高等学校・中学校女子部というカトリック系の私立校に進学しました。私は器楽部に入ってチェロを演奏したいと思っていたのですが、スポーツ好きの両親がそれが嫌だったらしく、無理やりテニススクールに連れて行かれたんです。ですがテニスがすごく楽しくなってしまう。中高時代はピアノを続けながら、テニス一色となりました。

建築を勉強しようと思ったきっかけをお聞かせください。

中学2年生のころ、友だちのお姉さんが「自分の夢を決めた」というのを聞いて、私たちも考えてみよう、ということで、建築家という仕事があることを知りました。中学3年生のときに家族旅行でスペインに行き、アントニオ・ガウディの建築を初めて見たときに、建築にはっきりと興味を持ちました。ひとりの人間が構想した建築が、その人の死後も多くの人によってつくり続けられていることに驚き、さらには、その建築が「バルセロナといえば、サグラダ・ファミリア」といったように、街のアイデンティティとなり得ることに、驚きました。

歴史都市で学んだこと

京都大学を志望した理由をお聞かせください。

京都に住んでみたかった、ということはありませんね。実際に住んでみたら、本当に面白かった。道に興味を持つようになったのも、京都の路地からきているように思います。高橋康夫先生の都市史の授業は、京都のまちを道から解き明かすものでした。どのように条坊制の街区割ができ、人々はそこにどのように道を通していったのか、通り庭がいかにまちに奥行きをつくり出してきたのか、京都にとっての奥とは、空間的なものだけではなく時間的なものでもあったとおっしゃっていたことは、とても印象に

残っています。

最初の設計課題は高松伸先生の担当で、ミース・ファン・デル・ローエの「バルセロナ・パビリオン」の図面のトレースと模型の制作でした。ところが提出すると「こんな模型はゴミだ」といってほぼ全員が捨てられてしまう。京大では有名な儀式のような課題で、もちろん私の模型は捨てられましたが(苦笑)、これはよい、と残された同級生がふたりいて、そのうちのひとりが私のパートナーの百田有希くんでした。また、ルイス・カーンの研究者であった前田忠直先生から、カーンの話をお聞きしたのも、今につながっていると思います。卒業設計は、網目状に配した共用廊下を図書館に仕立てた70戸の集合住宅をつくり、「図書×住宅」と題して提出しました。それまでは、設計をさまざまな条件や社会性から解くことに縛られて、なにを建築の中心に据えたらよいかわからなくなっていました。建築は結局のところ感性でしか判断できないとおっしゃった竹山聖先生の言葉はストンと私のなかに入ってきて、つくりたいものが見えてきました。

一回生のときに、増田友也先生の著作の読書会にも参加しました。当時はよくわからなかったけれど、今読み直してみると、とても勉強になります。先生は『家と庭の風景』で、まちに敷かれたグリッドと室内に敷かれた尺寸の寸法体系は運動していて、中と外は地続きで考えられていることや、障子や襖など現在は常設の建築要素が、かつては布や置き畳などといった仮設的なものをルーツとしていると述べていて、現代の建築にも同じ意識が生きていることが感じられます。伊東豊雄さんやSANAAについての文章をメディアなどで書かせていただく機会を通して、日本の現代建築をモダニズムの文脈のなかだけでなく、日本の建築史のなかのように位置づけられるだろうか?と考えたときに、増田先生の著書を改めて読み直したくなったのです。

いきなり実施設計に挑む

大学院は東京大学に進まれますね。

いつかは東京で暮らしてみたいと思っていました。東大生産技術研究所の藤井・曲淵研究室に在籍し、修士論文では東京の湾曲する坂道の視覚体験に関する研究をしましたが、大学院ではすでに実務が忙しくなっていました。

最初の作品は福岡市のアイランドシティ中央公園につくった「フォリー(あずまや)」です。これは、伊東豊雄さんが学生を対象にフォリーを実際につくるワークショップを企画され、それに百田くんが参加したことがきっかけでした。初めてのことだらけの実施設計が始まってしばらくすると、父の知人から長野県軽井沢の千ヶ滝に別荘を建ててほしいという依頼をいただきました。リーマンショックの影



2



響で実現しませんでした。修士を終えてからの1年間は、百田さんとこのプロジェクトに取り組みました。その後、私は独立し、彼は伊東さんの事務所に入所しました。

「Kemono」や東京都現代美術館での展示、「千ヶ滝の山荘」、

「称名寺の鐘撞き堂」などのプロジェクトには、時期は異なりますが共通する造形上のイメージが感じられます。これらの作品に通底するものがあればお教えください。

生き物のような建築をつくりたいと思っていました。鹿やフクロウが森の中にいるように、建築も周辺環境のなかに佇むように存在することができないかと考えています。それは、気持ちのよいカーブや、音でいうとパリパリとした感じ、すごく滑らかなものとすごくざわざわしたものが隣り合っている状態など、視覚的なことだけでなく、嗅覚や、触覚でも快楽的に感じるような、そんな建築です。その感覚は、幼少期に読んだ絵本や、ヨーロッパの児童文学から想像していた空間と重なる部分もあると考えています。

「二重螺旋の家」以降、狭小敷地に建つ塔状住居をいくつか手がけられていますね。これらで試みたことについてお聞かせください。

「二重螺旋の家」は、約6×7mの猫の額のような狭小敷地で、最小限で見積もってもプランの半分が階段になってしまう。ならば階段も居場所になるほうがよいと思い、二重螺旋を思いつきました。また、暮らしのなかに外部の動線が入ってくると、まちに住んでいることを実感できてとても豊かだと思うのです。

細長い場の連続のなかにいろいろな空間が存在するのが好きなのですが、それは幼いころに体験した祖父の家の記憶が影響しているかもしれません。

住宅は記憶に結びつくものであることは強く意識しています。子どもたちが育つ過程にも関わるものですし、私にも幼少期の家の記憶はたくさんあります。それは鮮明なかたちが思い浮かぶというよりは、シーンや手触り、匂いや気配みたいなもので、明るく軽やかだったり、暗さと重さを持つ感覚だったりもします。そういうイメージの断片を内包する家をつくりたいです。

包摂の彼方を見据えて

「Good Job! Center KASHIBA」は、障害者の支援施設ですが、どういことを考えられましたか。

私たちにとって初めての公共性を帯びた建築でした。クライアントである「たんぼの家」は、50年に渡り障害のある人たちのサポートをされてきた福祉団体です。このプロジェクトの目的は、障害のある人とともに社会での新しい働き方を考える場所をつくることでし

た。とはいえ、具体的な機能は決まっていなかったのですが、どのような施設にするかの話し合いからスタートしました。地域の町工場の人や大学の先生、博物館員など、多様な背景を持つ人たちが30人ぐらいい集められ、それぞれができることを申し出て知恵を出しあい、緩やかに仲間になって取り組んでいくような進め方でした。

そうしてでき上がった施設は、ケアをする人、される人という区分なく、また安全管理という名目でスタッフと障害のある人たちの使用領域を明確に分けることもせず曖昧に使用していて、みんなが自然体で共存しています。社会の見方が180度変わるような経験でした。

「山形市南部児童遊戯施設 シェルターインクルーシブプレイスコバル」とはどのような建物でしょうか。また「インクルーシブ=包摂的」という概念を述べられていますが、個を包摂する全体との関係性とはどういう建築のあり方を示すものでしょうか。

コバルは「Good Job! Center KASHIBA」からのつながりもありますが、もうひとつは東日本大震災の後に宮城県東松島につくった「東松島こどものみんなの家」からのつながりがあります。

建築には、人の前向きな気持ちを引き出す力があると思います。私たちも「みんなの家」を経験して、できていく喜びをまちの人たちにも共有してもらえる公共建築をつくりたいと考えていたので、地元施工会社や運営の皆さんと「インクルーシブ」という概念を共有して、ビジネスの枠組みを超えて取り組むことができたコバルのプロセスは特別なものでした。

しかし、最初から順調だったわけではありません。障害のある子どもたちに合わせて場所をつくったら、障害のない子どもたちにはつまらない場所になってしまうのではないか？という意見や、同時に障害のある子どもには今まで訪れられる遊び場はひとつもなかったからこそ、彼らが訪れられる場所を絶対につくりたいという意見が、ときに対立することもありました。異なる意見があったからこそ、障害の有無にかかわらず、誰もが楽しめる施設はどうしたらつくれるのかということを経験の命題として、チーム全体で本当にインクルーシブな状態をつくろうと一丸となって取り組めたと感じています。たとえば、片腕が使える人のためのポシェットをつくったら、授乳中のお母さんが使いやすいといってくれたり、目が見えない人のために耳で楽しめる空間をつくったら、みんなが音で楽しめる空間になったりと、特別な個人と深く向き合うことで、建築の慣習的な要素のひとつひとつを問い直していきけるのではないかと、コバルの設計を通じて感じました。

私たちは気持ちよさの基準を、無意識のうちに「標準的な人」を前提にしてイメージしていますよね。でも、たとえば耳が聞こえない誰かを想像して、床をふわふわにしてみたら触覚的に楽しめるかもし



れない、と設計してみると、それはその特別な誰かだけではなく、みんなが楽しめるものとなる可能性があり、床というものの概念を問い直すチャンスにもなります。

最近公共建築をつくるときに、市民との対話やワークショップを行うことが増えていますが、建築は何十年と建ち続けることを考えると、今、目の前にいる具体的な人たちは、限られた人でしかありません。その人たちとの対話にどれだけ普遍性があるのかとときどき疑問に感じることがありました。

プロジェクトで小豆島に通っていたとき、まちのお祭に参加させてもらったことがあるのです。そのとき、ああ、小豆島の人びとはきつとずっと昔からこうやって海に向かって感謝して生きてきたのだなと感じました。その瞬間、過去の人と、現在の人とがつながったように感じ、それはつまり未来の人ともつながっていることになったのです。そのように考えると、今、目の前にいる人と話し、その人がどんなことで笑うのか、どんなふうに時間を過ごしているのかを知ることが、その地域で生きてきた、あるいはこれから生きていく人々と触れ合うことと同じだと感じ、とても意味があると確信しました。

大西さんたちの建築のつくり方が、自然発生的な集落のでき方のように感じられます。個別解の集合を建築に変換していく際のルールのようなものはありますか。

たとえば「Good Job! Center KASHIBA」では、さまざまな意見に回答しながら建築をつくる必要があったので、プロポーシオンを崩すと建築の美しさが保持できないといったルールではなく、多少壁が伸びたり、ヴォリュームが大きくなったりしても気にならないような、むしろ意見を聞いたことが、迫力になっていくようなルールを最初に設定しました。一方で「コバル」では、有機的な形の大きな屋根を架けることで、太っ腹のお母さんがみんなを受け入れるような寛容さを目指しています。その場所に寛容な雰囲気があること、はいつも大切にしています。

2023年のヴェネチアビエンナーレ建築展のキュレーターとして、「愛される建築を目指して」というテーマを掲げましたが、大西さんたちが考える「愛される建築」とはどのような建築のことを指すのでしょうか。

ビエンナーレのタイトルは「愛される建築を目指して—建築を生き物として捉える」としています。建築を生き物だと捉えてみると、育てていこうという気持ちが生まれ、欠点も個性として愛しむ視点が生まれてきますよね。そのように建築と人との関係を双方向的なものとして問い直していく試みです。愛や心といった、数値や機能性では測り得ないものを、どのように建築の主題とできるかという試みでもあります。

大西さんたちの作品には木造建築がとても多いですが、木造建築についてどのようにお考えでしょうか。

「Good Job! Center KASHIBA」のときに実感しましたが、木造は構造体から家具まで、さらに増築までがシームレスにつくれるところが面白いと思います。つくることを使うことを連続的にとらえられるのが魅力ですね。また、林業の現場を知ることを通じて、その土地にある材料からどのような建築を考えられるか？も考えてみたくなりました。



建築の未来について

戦後70年が過ぎ、21世紀に入って20年以上経ち、世界においても日本においても、戦後民主主義の影は薄れ、社会構造に変化が見られます。2020年以降はコロナ禍で世界中が疲弊しました。そうした社会変化は建築にどのように影響しているとお考えですか。

インターネット上でも物理的にもあらゆる都市がつながって、世界の都市が平準化されていくなかで「建築は土地と必ず結びつく、その土地固有の動かないものである」という性質に今後ますます価値が見いだされていくのではないかと思います。

今の世の中では、どうしてこの制度ができたのか、その理由がわからないために、人びとは社会に対する実感が持てなくなっています。だからこそ、もう一度自分たちの手で社会を組み立て直していくことが必要だと思います。そのときに「場」を起点に社会を考えていくことに意味があると思うのです。

「小さなルームで他のひとりいるとき、あなたはそれまでけっして話さなかったことを話します。*」とはルイス・カーンの言葉ですが、場のつくり次第で人の集まり方も、対話の内容もさまざまとなり、多様で実感の持てる社会をつくっていけると思います。福祉にまつわる仕事をしている人たちとお話ししていて、いつもすごいと思うのは、制度が先にあったのではなく、自分たちの生きる場所を自ら発見し、実践してきた後に、制度が追いついてきた歴史があるということです。そのように社会をかたちづけていくことは、福祉の分野に限らず私たちにもできるはずですし、福祉とまちづくりとがつながる社会には、すごく可能性があるとと思っています。そのためにも、もう一度、場を共有することから、なにができるかを考えたいと思っています。

※ルイス・カーン建築論集 ルイス・カーン著 前田忠直訳 鹿島出版会 2008年 p.78より引用

③「二重螺旋の家」。鉄筋コンクリート造のコアに、ギャラリーや図書室などの機能を兼ねた廊下が螺旋状に巻き付く。廊下上部はテラスとして使われることで、内外の螺旋が二重に絡み合う。(写真: Kai NAKAMURA)

④「Good Job! Center KASHIBA」。構造としても機能する木壁により多様な居場所が生まれ、歩き回ると立体的な風景が立ち現れる。(写真: Yoshio MASUDA)

⑤「東松島こどものみんなの家」。大きな掘り炬燵のある「テーブルの家」、土間に薪ストーブのある「あたたかい家」、車輪付きで移動できる「お話と演劇の家」の3つからなる。(提供: 大西麻貴+百田有希 / o+h)

大西麻貴 (おにし・まき)

1983年生まれ。2006年京都大学工学部建築学科卒業。2008年東京大学大学院工学系研究科建築学専攻修士課程修了。2008年から大西麻貴+百田有希/o+hを共同主宰。2016年～京都大学非常勤講師、2022年～横浜国立大学大学院Y-GSA教授。主な作品にシェルターインクルーシブプレイスコバル(2022年)、Good Job! Center KASHIBA(2016年)、二重螺旋の家(2011年)ほか。主な受賞に2023年日本建築学会賞作品賞、BCS賞、2019年日本建築学会作品選奨・新人賞、2018年度JIA新人賞ほか。



THE PREMIUM ONE GALLERY

設計施工：山万株式会社
写真：新澤一平
文：橋本純

SE構法の実例



2階ダイニングからリビング方向を見る。幅4,550mm×奥行10,920mmの無柱空間。天井高は2,500mm。中央の折り上げ天井部分で2,600mm。



左頁：ダイニングから、ルーフトラスを望む。
 上：2階和室を見る。
 左：パントリーからキッチン、階段を経て和室へつながる動線。
 下：駐車場上部のルーフトラス。右奥がダイニング。



住み続けられる街に求められる住宅像

ユーカリが丘は、まちづくり企業を謳うディベロッパーの山万が長年育んできたまちで、昨今は域内での住み替えや建て替え需要が増えてきたという。今まで以上を求める顧客に応える住宅像とは。

山万株式会社は、千葉県佐倉市ユーカリが丘に新しいモデルハウスを建設した。同社営業本部、営業部の池上雄太さんと、設計を担当した住宅事業部の江野澤至紀さんにお話をうかがった。

湘南ハイランドからユーカリが丘へ

山万の創業は1951年、もとは大阪・船場の繊維問屋だった。売掛の商売では取引先の倒産で痛手を被ることがあるが、山万が住宅地開発を始めたのも、倒産企業の抵当で神奈川県横須賀市久里浜の山林を取得したことがきっかけという。折しも高度経済成長期、新築住宅の需要は高かった。山万も取得した山林の活用方法を求められ、それを機に繊維産業から不動産業へと踏み出した。不動産のノウハウを学び、山林を切り拓いて住宅地を造成し、住宅を建てて売ったところ、好評を得た。それが山万最初の住宅地開発で1968

年に販売を開始した「湘南ハイランド」である。湘南ハイランドでの経験を活かし、山万が次に手がけたのが千葉県佐倉市に位置するユーカリが丘の開発で、着手は1971年である。巨大な住宅地を開発し、短期間に分譲しきってしまうと、購買層の年齢や世帯構成などが似通ってくるため、居住者の総人口における年齢分布に偏りが生じる。今日、多くの郊外住宅地で問題となっているのは、その偏りの結果、生じた居住者平均年齢の高齢化であり、まちの行く末が心配される事態が随所で発生している。当時は住宅需要が過熱した時代なので致し方ない側面はあったが、山万は、住宅着工件数がピークを迎えた時代に、まちの将来を見越して、開発はするものの年間の住宅販売棟数を200戸を上限と定めた。その判断は瞠目に値する。実際に、現在、ユーカリが丘のまちを歩いてみると、造成が終わって販売を待っている土地が随所に

見られる。成長管理型の開発、その点が多額の不動産開発を手がける企業と、まちづくり企業を標榜する山万の本質的な違いであった。

まちを運営する

ユーカリが丘の開発は、その後の山万の事業の中核をなすものとなる。東京都心部から東へ40km弱、目指すところは、住み続けられるまちづくり、である。それを象徴するもののひとつとして、新交通システム「山万ユーカリが丘線」の敷設があげられるだろう。ユーカリが丘の販売開始は1979年だが、その前年の1978年に鉄道敷設の事業認可を取得し、1982年には開通させている。まちづくりの根幹として交通インフラを同時に着手したわけである。京成電鉄本線ユーカリが丘駅（同駅も、山万による請願駅とのこと）から北側に、ラケッ

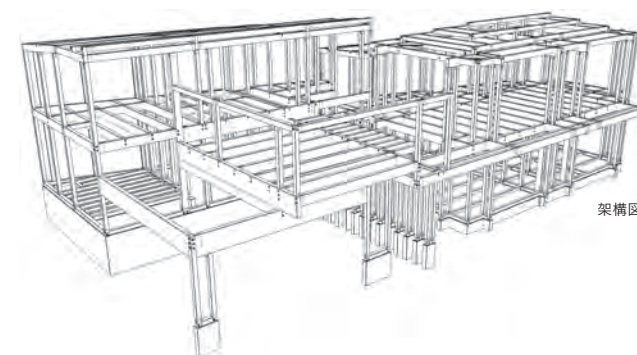
ト状で先端部分がループを描く営業キロ数4.1km、6駅からなる軌道である。開発はこの沿線で順次行われ、ループの内側には農家が残り自然環境が適度に保全されている。小中学校などを建設・提供し、医療機関や商業誘致を行い、さらに保育所などの育児施設や「福祉の街」も建設した。現在の居住者数は約18,800人、最終的には居住人口30,000人のまちにしていく予定と聞く。

求められる新しい住宅の価値

人口動態を一定に保つ成長管理型のまちづくりは、次第に循環型のまちづくりへと変化してくる。域内での建て替えや住み替えといった需要が生まれてくるからである。今回のモデルハウスは、ユーカリが丘の文化水準にマッチした新規需要に加え、そうした建



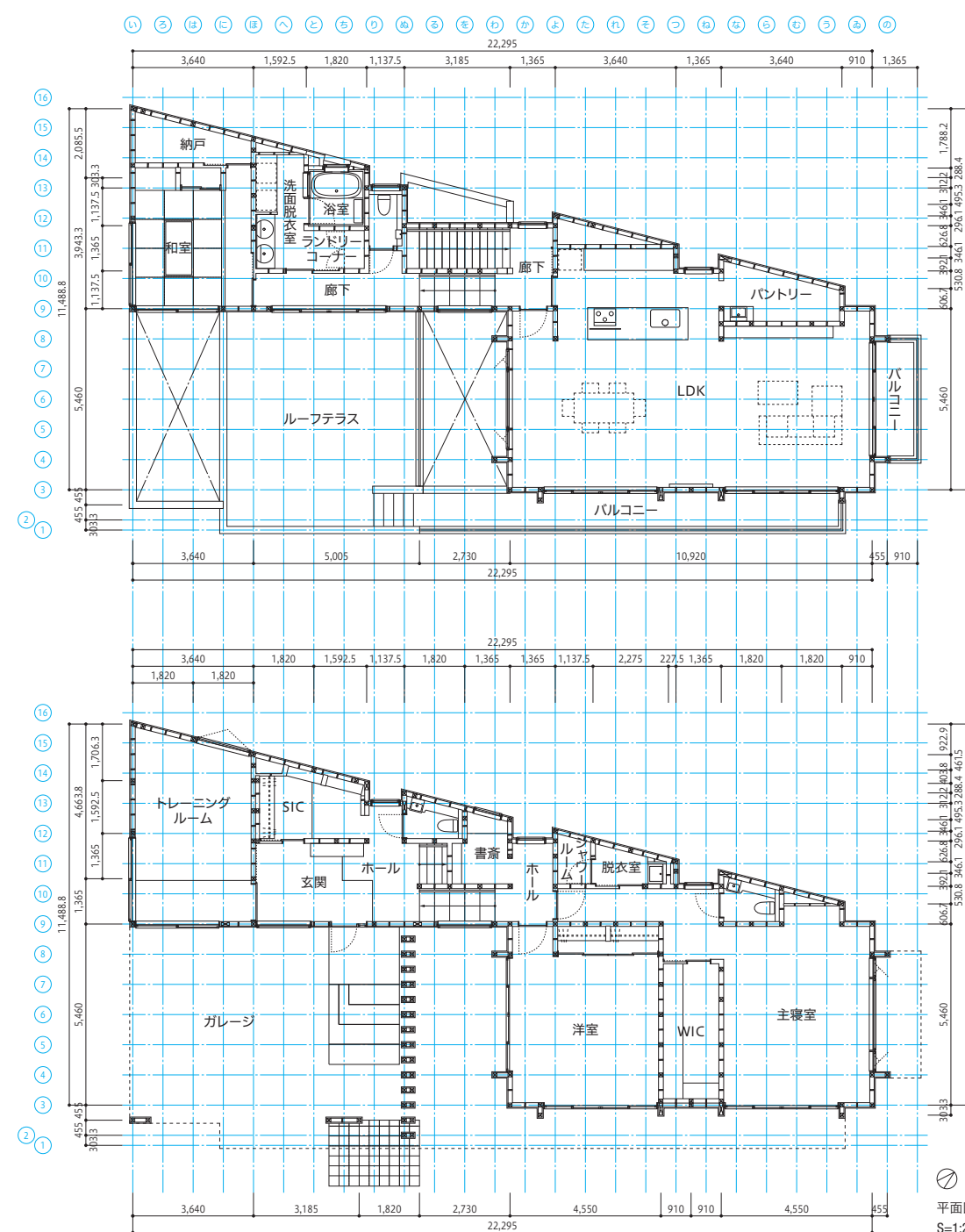
左上: 玄関からトレーニングルーム方向を見る。
右はシューズクローク。
左頁左下: 玄関から階段室を見る。
左頁右下: 1階主寝室を見る。造成によって前面道路からの高さを確保し、大きな窓を確保した。



架構図



南東側から見る全景。(写真提供: 山万株式会社)



建物名称: THE PREMIUM ONE GALLERY
所在地: 千葉県佐倉市西ユウカリが丘4丁目17番10~11
主要用途: 専用住宅
建主: 山万株式会社
設計・監理: 建築: 山万株式会社 担当者名: 江野澤空紀 構造: 株式会社エヌ・シー・エヌ
施工: 施工・SE施工: 山万株式会社
敷地条件: 用途地域: 第1種低層住居専用地域 / 第1種住居地域
防火指定: なし
道路幅員: 南東6m / 北東20m
駐車台数: 2台
構造・構法: 主体構造・構法: SE構法 (木造軸組構法)
基礎: ベタ基礎
杭: 鋼管杭
規模: 階数: 地上2階 軒高: 6,885mm 最高高さ: 7,258mm 主なスパン: 5,460mm 敷地面積: 325.47㎡ 建築面積: 171.33㎡ (建築率: 52.65%) 延床面積: 288.30㎡ (容積率: 88.57%) 1階: 163.62㎡ 2階: 124.68㎡
工程: 設計期間: 2022年2月~2022年7月 施工期間: 2022年8月~2023年4月
設備システム: 空調: 空調方式: 個別空調 熱源: 電気 衛生: 給水: 公共水道 給湯: ガス給湯器(エコワン) 排水: 公共下水道 電気: 受電方式: 架空引き込み 防災: 熱・煙感知器 性能: 断熱等性能等級: 5相当 1次エネルギー消費量等級: 6相当

で替え層に向けての提案という側面も大きい。場所は、西ユウカリが丘4丁目、ユウカリが丘線井野駅から西に500mほどの、南東側はまだ住宅が建っていない地域に位置する。敷地は2区画分で面積は325㎡、北東の角地で南西側に向かって2mほど上がった斜面地である。北東側は幹線道路に面するため、道路面から1mほど高くなるように造成し、敷地レベルで視線をカットしている。延床面積288㎡という規模の大きな住宅だが、将来は分譲予定とのことである。

駐車場(間口奥行とも5,915mmで2台分)を、敷地南西側に配し、その脇に玄関アプローチを設けている。玄関奥には広いシューズクロークとコートクローク、玄関左にはトレーニングルームもある。玄関右は階段室で、1,000mm下がったレベルに主寝室と子ども室、1,930mm上がったレベルにLDKを配している。敷地の高低差を活か

してスキップフロアとしている。特に玄関ホールと1階寝室、2階のLDKと和室をつなぐ階段は、蹴上げ166.7mm×踏面455mmという勾配の緩い階段を採用しており、印象的である。

2階のリビングダイニングは4,550mm×10,920mmの無柱空間で、ダイニングの北側にキッチンを配し、そこを軸にパントリーから西側の和室まで、動線が貫く明快なプランである。駐車場の上部には広々としたルーフトラスを設け、リビングから心地よいその屋外空間が望める。

建て替えに際しては、顧客は今まで以上のなにかを求める。それを提示し続けることも、手厚いケアを標榜する山万のまちづくりの一環である。ここではそれを、さまざまな生活のゆとりの提案に見ることができる。そうした空間づくりの武器として山万はSE構法を選び、このモデルハウスを建てたのである。

より良い住まいの道しるべ

23

案内人



安多 茂一 (安多化粧合板株式会社 代表取締役社長)

文：長井美咲

家具や照明、ファブリック、植栽など、生活に求められるコンテンツを提案できると、顧客の信頼度が増します。
この連載ではその道のプロフェッショナルがそれぞれの視点で案内します。

「突板化粧合板で、室内に様々な風景をつくる」

天然木を薄くスライスした突板^{つまいた}を基材に貼り付け、内装や家具に利用する化粧合板。私たちはこれをつくる大阪の小さな町工場です。1959年に父が創業し、父の代は家具調家電の化粧合板を手がけ、社員が35人ほどいました。今は私を入れて6人。会社を継いだとき、これくらいの人数でやっていきたいと思っていましたから、ちょうどよい規模です。システムやルールがなくても会社が回り、楽しいものづくりに集中できます。

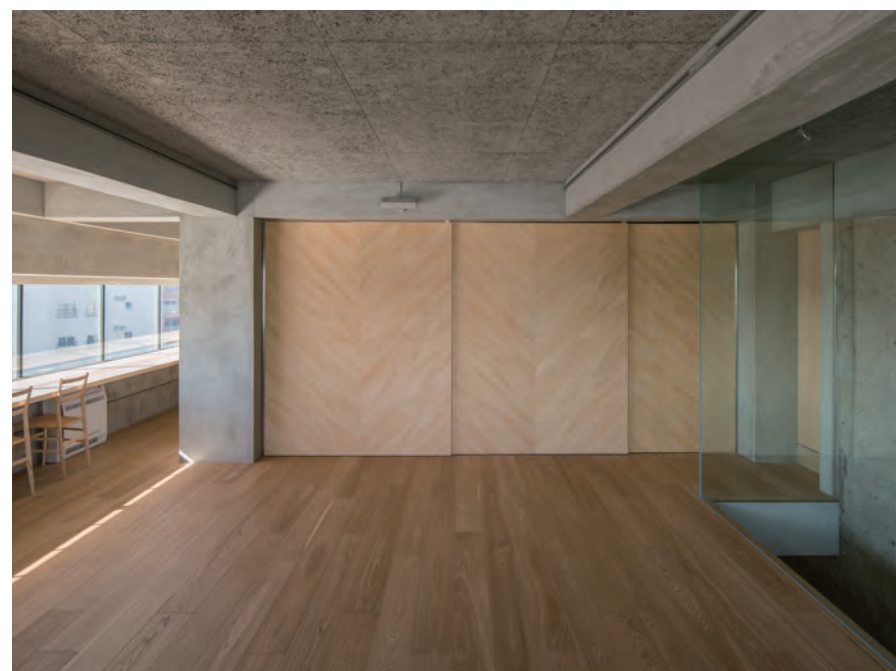
私たちは「木で風景をつくる」ことを目指しています。そのため突板から自分たちで作り、突板の材料となる木も、自ら山に入って伐り出したり、各地の山師や製材所と連携して市場に出る前のものを入手したりしています。一般的な突板の化粧合板メーカーは、表面材である突板を突板加工会社から仕入れているところが大半で、突板加工会社は材木会社から丸太を、材木会社は市場で原木を仕入れます。その流通経路を素っ飛ばして「川上」に直にアプローチしているわけですが、このやり方だから個性ある木を扱えます。

海外の木材業者からも稀少品の情報が入ります。たとえば、デザイナーの和田浩一さんが設計した「入船studio」のキッチンに使われている黒褐色の「ボグオーク」。ボグ (bog) は沼地や湿地帯の意味で、ボグオークはポーランド南部の泥炭の沼底に数千年にわたり沈んでいたオークの倒木を引き上げたものです。この奥行きある黒の色合いは着色や燻蒸では生み出せません。

突板用の木材の在庫は樹種にすると200近くあるでしょうか。天然木は同じ樹種であっても個体ごとに色柄が違うので、当社の製品はすべてワンオフ (1回限りつくられるもの) です。突板のカタログや品番もありません。タイミングを逃すと二度と手に入らない木ばかりですから、お付き合いの長いお客さんほど、当社にしょっちゅう木を見に来られます。

突板の貼り方の可能性は無限

お客さんは、設計者や工務店の方など空間の



建築家の永山祐子さんが設計した自邸「杉並のいえ」。中古マンションを改修しており、LDKと寝室の間の可動間仕切りに、安多化粧合板のリンデン (セイヨウシナノキ) の突板化粧合板を採用。木目をていねいに選び、ヘリンボーン張りになっている。ヘリンボーン張りは葉脈のイメージから。永山さんは山梨県小淵沢町の複合施設「女神の森セントラルガーデン」(2016年)での仕事以来の付き合い。(写真：表恒匡)



建築家の半田俊哉さんが設計した兵庫県の「芦屋の家」。気候変化の激しい北海道大雪山系で育ったナラの突板化粧合板をダイニングの壁面やキッチンの面材、和室の壁面に採用。ナラはきめ細やかなクリーム色の木肌にくっきりと白太が入り、木目が力強いのが特徴。節の雰囲気や白太の多少でさまざまな風景をつくり出すことができる。(写真：エイチ・アンド・エー建築士事務所)



和田浩一さんが設計した「入船studio」。キッチンは黒を基調とし、収納の面材には「ボグオーク」の突板、カウンター下にはユーカリの玉壺を燻蒸した突板の化粧合板を採用。ボグオークはいわゆる「神代木」で、長い年月をかけて泥の中で炭化して石のように硬くなり、ダイヤモンド刃でないとスライスできないほどだという。(写真：Nacasa & Partners)



安多化粧合板の突板のギャラリー (ショールーム)。建築家の今津康夫さん (ninkipen) が設計を手がけ、工場の向かいに2019年に完成した。他では見られない表情豊かな突板の数々を見て、その来歴を聞くと、突板の無限の可能性が感じられる。このギャラリーが出来てから、大阪府八尾市の同社まで足を運ぶ設計者や工務店が増えた。住宅の場合は建主と一緒に訪れることが多いという。(写真：河田弘樹)



つくり手を中心ですが、最近は建主の方がSNSなどで当社を見つけて、設計者や工務店の方を連れて来るケースが増えています。豊富な樹種の在庫ロットから、お客さんのイメージに合ったロットを選び出し、十分な打合せを経てサンプルを提案し、理想のイメージを具体化していきます。

お客さんからの依頼も抽象的なものが多いんです。「オーストラリアの乾いた大地を表現したい」とか。最近盛り上がったのは、ある設計者からの「おばあちゃんを元気にするキッチンをつくりたい」という依頼でした。おばあちゃんは設計者自身の親族ではなく、高齢のクライアントのこと。昔は家によく友達を呼んでいたのに、今は友達を呼んでも楽しんでもらえないキッチンではないという話を聞き、キッチンの収納の面材と水栓金具を一新する軽微なリフォームを低予算で行うことになったそうです。

その面材に当社の突板化粧合板を使いたいということだったので、樹種も意匠も任せると言う。そこで北海道のニレの木で、白太という木の表皮に近い部分の突板を使い、白いラインが縦目になるように貼ることを提案しました。キッチンの面材は木目が横に流れるようにデザインすることが多いけれど、あえて縦目にするので、おばあちゃんがしゃきっとなるのではないかと考えたのです。

製造は、突板づくりも、突板を基材に貼り付けるのも、1枚1枚手作業です。もっとも時間がかかる工程は、突板をどのようにカットして組み合わせるかを考える段階。白太の位置や木目の組合せひとつで全体の印象ががらりと変わりますから、肝となるところです。

いわゆる無垢信者からは、突板は“まがいもの”だという目で見られることが多々あります。でも、無垢も突板合板もプリント合板もそれぞれいいところがあり、大切なのは“適材適所”ということではないでしょうか。業界では異端の存在ですが、私たちの話から、天然木の突板化粧合板の面白さや可能性を知っていただけたらと思っています。

Report

第67回 SE構法登録施工店勉強会を開催

「木造住宅が変わる！建築基準法改正で準備すべきこと」

文：酒井新



エヌ・シー・エヌ代表の田鎖郁男から建築基準法改正実施に向けた情報提供を行った。

2023年8月24日、第67回 SE構法登録施工店勉強会がライブ配信によるウェビナー形式で開催された。今回のテーマは2025年4月に施行される建築基準法のふたつの改正。いずれも木造住宅の建築に深く関わり、今後の事業展開への影響は非常に大きい。当日は「木造住宅が変わる!!」というタイトルでエヌ・シー・エヌの代表、田鎖郁男が建築基準法改正実施に向けた最新情報と準備のポイントについて詳細な報告を行い、続いて環境設計部の前田哲史が「省エネ基準適合義務化 準備のポイント」を解説、さらにCN事業部の松延隆行が2025年に向けたプロモーションのロードマップを紹介した。

田鎖の報告は4つのポイントについて行われた。ひとつ目は今回の「4号特例の改正」と「省エネ基準の適合義務化」に合わせて、いつまでに何を準備しなければならないかということについてだ。2025年4月1日施行とされていることから、まだ先のこのように感じられるが、逆算していけば日程に余裕はない。施行日以

降に確認申請が行われるものが改正法の対象となるので、実施設計に3カ月をみると建築請負契約の締結は2025年1月ごろとなり、プラン提案・見積は2024年10月ごろには行わなければならない。そのためには2024年の夏には営業・接客を開始したい。このように逆算していくと2024年4月ごろまでには法改正に対応した商品の改定をすべて済ませておかなければならない。SE構法で建築する場合は新たに加わる手続きや業務はほぼゼロといえるが、在来工法やツーバイフォー工法で建築する場合は業務が大幅に増える。2023年10月には施行令や告示の内容が明らかにされるので、それが示されたらすぐにでも準備に入ることが必要になる。

いよいよ構造計算が実質義務化に

報告の2点目として、「4号建築物」の廃止について詳細に解説した。従来、2階以下で延べ面積500㎡以下の木造建築物は建築士が設計・工事監理を行った場合には構造耐力関係規定に関する審査省略の対象となっていた(い

ゆる「4号特例」)。しかし改正法の施行以後は、特例の対象が平屋で延べ面積200㎡以下の木造建築物(新3号)のみになり、階数が2以上で延べ面積200㎡を超える木造建築物(新2号)は、すべて構造規定の審査が必須となる。また今回の改正ではすべての新築住宅に省エネ基準適合が義務付けられ、省エネルギー等級4以上であることを証明する書類が確認申請になる。

ZEH水準の家の壁量は大幅に増加 多雪地域では柱が150角必要に

さらに田鎖が「意外に知られていないが非常に重要」と指摘したのが同じく2025年4月1日に施行となる「ZEH水準等の木造建築物の構造基準の変更」だ。省エネ性能の高い木造住宅を対象にしたもので、新基準では必要壁量を軽い屋根の2階建ての場合で約1.8倍、同じく3階建てで約1.7倍にまで増やさなければならない。さらに「多雪地域」というカテゴリーが新設されさらに多い壁量が要求されている。積雪2m地域では現行の2.85倍という



環境設計部 前田哲史



CN事業部 松延隆行

ほとんど壁だらけといわざるを得ない数値も示された。柱の太さについても階高3mの場合は120mm(4寸角)、多雪地域の場合は150mm(5寸角)の柱を使うことを求めている。省エネ基準4が義務化されるなかでは、差別化のためにZEH水準の家を目指すことが多くなる。すると壁量が増え、柱が太くなり、特に多雪地域はプランが極めて限定されてしまう。2025年4月の改正建築基準法の施行は、商品企画や事業フローの変更、新たに必要となる手続きに対応するための人や資金の確保という意味でも木造住宅事業に非常に大きなインパクトをもたらすものになる。しっかりと準備をして、むしろ自社商品や事業展開の差別化のチャンスと捉えて今から対応していきたい。最後に田鎖が「『日本に安心・安全な木構造を普及させ、資産価値のある住宅を提供する仕組みをつくる』というビジョンのもとに登録施工店とともに歩んできたエヌ・シー・エヌは、今こそ本領を発揮すべき地点に立っている。今回の改正法の施行で新たに求められる構造審査への対応や省エネ基準適合の証明は、SE構法で現在行っている計算をすれば、すべてクリアでき、業務フローも変わらない。広いリビングや大開口、吹抜け、ビルトインガレージなどをどう確保するか、今多くの住宅メーカーが頭を抱えている。今回の建築基準法大改訂もむしろ私たちのつくる住宅の魅力を改めて示す好機と捉えて一緒に乗り越えていこう」と報告を締め括った。

建築確認申請前の設備仕様の確定が必須に

続いてエヌ・シー・エヌ環境設計部の前田が省エネ基準適合義務化に向けた準備のポイントについて話した。省エネ性能は外皮性能(断熱性能、Ua値とηAC値)と1次エネルギー消費

量(BEI)というふたつの指標で評価される。数値自身はそれほど確保が難しいものではないが、確認申請に進む前に適合性判定を受け、適合判定通知書を受け取ってから建築確認申請をすることになる。また完了検査時には省エネの仕様について現場検査も行われる。従来の業務フローを見直す必要があり、特に建築請負契約の前に設備仕様を固めておくことが欠かせない。その性能によって1次エネルギー消費量は大きく変わってくるからだ。引き渡しスケジュールに余裕を持たせると同時に、「施主支給」などとしているものには特に注意が必要だ。さらに前田は2024年4月から始まる「建築物の販売・賃貸時の省エネ性能表示制度」(注文住宅は対象外)について紹介。今後この表示制度が浸透することで、より高い省エネ性能(より安い光熱費)の住宅を求めると予想している。エヌ・シー・エヌの省エネルギー計算を活用すれば、より高性能な住宅を提供するためのさまざまな提案ができるので、ぜひ活用いただきたいと話を締め括った。勉強会の最後にCN事業部の松延から今後のプロモーション計画について説明が行われた。2025年の改正建築基準法施行は、SE構法の魅力をアピールする大きなチャンスと捉えている。広告展開はもちろんだが、エヌ・シー・エヌのホームページをエンドユーザー向けにリニューアルしてダイレクトに住み手にSE構法の魅力を伝えると同時に、そこから登録施工店への導線を強化し送客を図っていく。モバイルやSNSも意識し、また都道府県別の検索の利便性も高めていく。登録施工店の皆様には住宅の事例写真を掲載していただき、一緒に魅力あるホームページにしていきたいと呼びかけ、1時間半に及ぶ勉強会を終了した。公布後の10月に改めて登録施工店勉強会を実施する。

Notice

SE構法技術研修会

SE構法技術研修会をE-Learning(オンライン)にて実施しています。現場施工に照準を絞り、実際の現場の流れに沿って事例を交えて解説いたします。工務ご担当の方をはじめ、設計、営業のご担当者様もぜひともご参加下さい。

■開催日程

第188回
2023年11月1日(水)~11月14日(火)
※お申込み期間
2023年10月1日(日)~10月15日(日)

第189回
2023年12月1日(金)~12月14日(木)
※お申込み期間
2023年11月1日(水)~11月15日(水)

上記期間中におよそ5時間の講義をオンラインで受けていただけます。修了試験もオンラインで行います。

参加費:20,000円(消費税込)

参加希望の方は下記のURLよりお申込みください。

<https://business-online.ncn-se.co.jp/workshop/>



定員は各回35人です。お早目のお申し込みをお勧めします。

ご不明な点は、エヌ・シー・エヌの営業担当者までお問い合わせ下さい。

Information for Constructors
Network SE

ネットワークSE 189号
2023年9月発行【隔月発行】

発行者 田鎖郁男
マネージメント 安藤幸子(エヌ・シー・エヌ)
編集長 橋本純(ハシモトオフィス)
編集 長井美咲 / 久留由樹子
デザイン 橋本祐治(Bushitsu)
図面トレース 長谷川智大
印刷 山田写真製版所

表紙写真:杉野圭

株式会社エヌ・シー・エヌ
〒100-0014
東京都千代田区永田町2-13-5 赤坂エイトワンビル7F
TEL. 03-6897-6311

© NCN 2023 Printed in Japan 禁無断転写複製